

## 【日記をつける／読む】 第47回

日記はおもしろい。書き方も読み方も自由で、なんの制約もない。

石川久美子は、更級日記<sup>さらしな</sup>で一人の女性の人生を読み解きながら、重ねてその時代を歴史として読み深めていく。日記をつける行為は、それ以前の日記を「ためし」にすることで、個人の経験を広げ、こえて、文学制作行為になりうることを示した。

「ためし」は「あこがれ」と言い換えたい。自分の経験を、あこがれる人の経験を意識して書いていく。それは他の人の経験をくぐつた自我の自覚につながる。自分や他者、歴史を知ろうとする石川の研究は、祖父の日記がたとえ実存しなくとも、「日記」を仮定することで戦争がリアルに感じられる方法に結実する（「はじめに」）。

梅根悟は、自伝を「その人の人生行路におけるさまざまな問題解決の経験であり、……」ここまで生きてきた一連の生命の履歴書」（『著作集7』 134



頁）と見て歴史につなげていくが、日記は自伝の素材と考えられる。

更級日記では、子どものことは、子育てに対する母親の願望の記述にとどまっているが（173頁）、子どもの姿や子育ての〈問題解決〉を書いていけば、育児日記になる。足立節雄『あい・出あい・育ちあい』は、孫の育児日記に読める。ルソーの『エミール』は育児日記の文学化とも読める。また、ピアジェ『知能の誕生』は、自分の3人の娘のエピソードにあふれ、育児日記に発達の検討を加えた形で、それを荒木未知子『乳児期および幼児期の「交流」の形成と発達の研究』は「ためし」にしている。この系譜で「育児日記型実践記録」も考えられる。発達が読み取りやすい記録になる。

（研究部・加藤聡一）

### 参考文献

\* 石川久美子『日記で読む日本史4「ためし」から読む更級日記』  
漢文日記・土佐日記・蜻蛉日記からの展開 臨川書店、2018年。